

## アウグスティヌスにおける「秩序」の理解 —『秩序』を中心に—

菊地伸二

### はじめに

アウグスティヌスは、有名な回心の経験をした後、ミラノの北にあるカシキアクムに数人の友人たちと退き、そこで幾つかの対話篇を手がけた。いわゆるカシキアクム対話篇と呼ばれるものである。この小論で扱う『秩序』という著作もそうしたものの一つである。受洗を直前にひかえたアウグスティヌスの作品からは、ともすると、『告白録』の「回心」の出来事に示されるような神の前に涙を流すような一人の人間の姿が伝わってくることを期待したくなる場所であるが、そのような姿はこれらの作品では必ずしも前面に現れておらず、むしろそこに見られるのは、仲間たちと対話を続ける先輩格であり指導者としてのアウグスティヌスの姿である<sup>(1)</sup>。

このようなことから、アウグスティヌスの回心は本当のことだったのであろうか、あるいは、あの回心はいわゆるキリスト教への回心なのではなく、むしろ、彼が回心の直前に耽読し、深い影響を受けていた新プラトン主義への回心だったのでなかろうか、といった憶測が飛び交うことにもなる。これらの憶測については、それなりの長い研究史があり興味深いものであるが、あくまでもこの論文の主題ではない。

この小論で、私たちが試みようとする事、それは、アウグスティヌスが『秩序』という著作において、そもそも「秩序」についてどのように考えていたか、ということテキストに即して見ることである。

そこで以下、次の順序で話を進めていくことにしよう。

1. 『再考録』における『秩序』
2. 『秩序』の執筆をめぐって
3. 『秩序』の概容
4. 『秩序』における二つの「秩序」
5. 多義的な「秩序」?

6. 『秩序』が目指そうとしたもの
  7. 「秩序」を知るために求められること
  8. 神的事物に向かうために
  9. 「神の摂理」の「秩序」
- おわりに—「秩序」とは

### 1. 『再考録』における『秩序』

アウグスティヌスが回心をしたその当時、「秩序」の問題に大きな関心を持っていたことは言うまでもないことであるが、それと同時に、その問題についてまだ十分な解答を与える力を兼ね備えていなかったこともうかがい知ることができる。そして私たちはそのことをアウグスティヌス自身の言葉によって知るのである。

それではアウグスティヌスは、自らが著した『秩序』についてどのように評しているか。それは、最晩年にアウグスティヌスが書いた『再考録』のうちに見出される。

同じとき、すなわち、『アカデミア派駁論』を書いていたとき、わたしはさらに『秩序』二巻を書いた。この書物の中では、神の摂理の秩序はすべての善と悪とを含むかどうかという大きな問題を取り扱った。しかし、理解するのに非常に困難なこのことがらを、いっしょにたずさわっていた人びとに、討論によって把握させるよう導くことはとてもむずかしいとわかったので、わたしは研究の秩序について語ることを選んだ。というのは、人はそれによって形体的なものから非形体的なものへと進ませることができるからである<sup>(2)</sup>。

このアウグスティヌスの振り返りの言葉、より具体的に言うと、およそ40年前に書かれた自著に対する評価によれば、『秩序』という作品において、自ら（あるいは自分たち）が関心を抱いてい

た神の摂理の問題を扱おうとしたが、それを少なくとも対話篇という討論形式で理解へと導かせることは非常に難しかったために、その当時、自分にとっては、より説明することが容易であった研究（学問）の秩序の話題に絞り込んで話を展開したという主旨のことが記されている。

こうして、『秩序』は、当初の目標をいわば方向転換した作品として、失敗作とまでは言わないまでも、完成度のけっして高くない作品という印象を与えていることは否めないであろう<sup>(3)</sup>。

それでは『秩序』という作品はどのような動機によっていつごろ執筆されたのであろうか。

## 2. 『秩序』の執筆をめぐる

『秩序』という作品は、「ゼノビウスよ」という呼びかけから始まっている。執筆の直接の動機となっているのは、ゼノビウスが、かねてからの質問の答えを催促して詩で呼びかけたことにある。それまでにアウグスティヌスは彼と事物の秩序について議論することがあったようであるが、そのゼノビウスにいわば献呈するような形となっている。

「この書物は、わたしたちの労力に捧げられるよりも、むしろあなたのお名前に捧げられることによって、わたしたちにとってはいっそう喜ばしいものとなるのです<sup>(4)</sup>」とある通りである。

また、執筆の時期についてであるが、『秩序』はアウグスティヌスが回心をした直後、カシキアクムに退いたときに執筆されたいわゆるカシキアクム対話篇と呼ばれる作品のうちの一つであり、『アカデミア派駁論』『至福の生』に続く三番目の作である。具体的な執筆時期についてオールマンは、二巻から成る本書のうち、第1巻は386年の11月16及び17日、そして第2巻は、『アカデミア派駁論』の執筆を挟んで11月23日ごろと推測している<sup>(5)</sup>。

中断が途中であったとはいえ、わずか一週間ぐらいの間で執筆されたことになる。

それでは『秩序』にはどのようなことが書かれているのであろうか。

## 3. 『秩序』の概容

二巻から成る本書は、基本的に対話篇の体裁をとっており、そこにはアウグスティヌス以外に、リケンティウス、トリゲティウス、アリピウス、ナヴィギウス、母モニカなどが登場してくる。

第1巻の冒頭では、献呈者であるゼノビウスへの呼びかけとともに、摂理の問題のもつ難しさ、それを知るために魂は自分自身に立ち帰らなくてはならないこと、そのために必要な学問のことなどが述べられる。

本格的な対話は、水の流れる音が時に高く、時に低くなっているところから、そのような変化を引き起こしているものについて、アウグスティヌスがリケンティウスと語るところから始まっている。原因なくしては何ものも生じないことが言われ、秩序は原因のつらなりからなっていることが確認される。

続いて、秩序はすべてのものを含みうるか、ということが議論され、もし、そのなかに善いものだけでなく悪いものも含まれるとすると、秩序を愛する神はそのうちにある悪いものも愛するの、という疑問が生じてきて、その解釈には難があることになる。

一日目の議論が終わり、日を改めて秩序についての最初の定義がアウグスティヌスによって提出される。それは、「秩序とは、もしわたしたちが人生においてそれを保持しておくならば、わたしたちを神へ導くものであり、また、人生においてそれを保持することがなければ、わたしたちが神に至るところのないものである」というものである。それに対してリケンティウスは、「秩序とは神が造りたもうたすべてのものがそれによって支配されるころのものである」と定義する。しかし、当の神は秩序に支配されるのかどうか、ということが問われ、それについては十分に答えが得られぬまま第1巻は終了する。

それから数日の中断の後、再び討論は始まる。すなわち第2巻である。

リケンティウスの「秩序とはそれによって神が万物を支配したもうところのものである」という定義がもう一度話題に上がる。アウグスティヌスによって、「それでは神はどのようにして万物を

秩序によって支配したのか、すなわち、自分自身をも秩序によって支配したのか、それとも自分自身を別にして自分以外の他のものを秩序によって統御したのか」ということが問われ、それについてのやりとりをする中で、「善なるものも悪なるものも秩序によって支配される」とリケンティウスは発言する。

ここからアウグスティヌスは議論の方向を変え、「運動するものは神と共にあるのかどうか」という質問をしながら、「神と共にあるもの」についての考察を始めることになる。その考察はやがて「知者の魂は、神が常に臨みたまうゆえに、不動である」ということを帰結するとともに、感覚的なものから感覚を超えたものへと、いわば上昇していく中で、秩序を見出していくという方向に話を展開していくことになる。

その後、話題は、文法学、弁証論、修辞学、音楽、幾何学、天文学へと移っていき、学問は人間を神的事物にまで高めることが言われる。

このようにして、先に見たように、神の秩序の話は途中で途絶えてしまい、学問における秩序の話へと移行して『秩序』は幕引きとなるのである。

それでは、『秩序』において、アウグスティヌスは、「秩序」についてどのように考えていたのだろうか。

#### 4. 『秩序』における二つの「秩序」

アウグスティヌスが、「秩序」についてどのように考えていたかを見るために、再度、『再考録』の文を引用することにしよう。

この書物の中では、神の摂理の秩序はすべての善と悪を含むかどうかという大きな問題を取り扱った。しかし、理解するのに非常に困難なこのことがらを、いっしょにたずさわっていた人びとに、討論によって把握させるよう導くことはとてもむずかしいとわかったので、わたしは研究の秩序について語ることを選んだ。というのは、人はそれによって形体的なものから非形体的なものへと進ませることができるからである。

この文章によれば、少なくとも、アウグスティ

ヌスは「秩序」を二義的に用いているとすることができる。すなわち、一つは「神の摂理」という「秩序」であり、もう一つは「研究」という「秩序」である。

さらに、その当時の彼にとって、「神の摂理」の「秩序」については、そのことを討論によって理解へと導くことが困難であったが、他方、「研究」の「秩序」に関しては、それよりも容易に理解へと導くことができたということである。

それでは「神の摂理」の「秩序」とはどのようなものであろうか。そしてまた「研究」の「秩序」とはどのようなものであろうか。

前者の「神の摂理」の「秩序」については、それは、まさしく「秩序はすべてを包含する」(I,6,15)とされているところのものである。神の摂理は、果たしてこの世界の善いことも悪いこともすべて含むかどうか、ということがそこでは問題とされる。

しかし、「もし悪が秩序に含まれるならば、秩序を愛したもう神は悪をも愛するのか」ということが新たな疑問として生じ(I,7章)、悪が秩序に含まれ、しかも、秩序自体が最高の神に由来し、神によって愛されるとするならば、悪もまた最高の神に由来し、神は悪をもまた愛していることになる。しかるに、秩序に従えば、神は善を愛し、悪を愛したまわないのであり、矛盾するのではないかと反論が生じ、議論は難航する。

「秩序」については新たに、「秩序とは神が造りたまうたすべてのものがそれによって支配されるところのものである」(I,10,28)と言われる。

それに対しては、神はどのようにして万物を秩序によって支配したもうのか、と問われる。どのように、ということの意味は、神は自分自身をも秩序によって支配しているのか、あるいは、自分自身以外の他のものは秩序によって支配しているのか、ということである(II,1,2)。

だがしかし、それについても明確な答えは与えられず、「善なるものも悪なるものも秩序によって支配される」と言われるのみである。

討論形式をとっているこの著作において、アウグスティヌス自身が、当の「秩序」についてどのように考えていたかを見極めることは難しいところがある。また、まさしく対話篇というものの性

格上、自分自身がある結論に至ったから、ということだけで著作を完結しようとしていないところもあり、それが『再考録』にある「理解するのに非常に困難なこのことがらを、いっしょにたずさわっていた人びとに、討論によって把握させるよう導くことはとてもむずかしいとわかった」という言葉に示されていると思われる。

それでは後者の「研究」の「秩序」とはどのようなものであろうか。

『秩序』の第2巻に入ると、いわゆる自由学芸の諸科目について言及がなされている。

たとえば、第12章では「文法学」について、第13章では「弁証論」と「修辞学」について、第14章では「音楽」について、第15章では「幾何学」と「天文学」について言及がなされる。

そして第16章では、こうした学問について、それは人間を神的事物にまで高めるものであると言われる。

また、これらの学問の「秩序」を明らかにするために、「理性」について言及がなされ、とくに、この世界における「理性に適うもの」(rationabile)に焦点があたる。それは感覚的なものにおける理性の跡とも言われるものであり(第11章)、感覚の中では、目と耳とが特別な地位に置かれている。そして、理性と耳との関わりの中では「韻律」を重視する「音楽」が、また、理性と目との関わりにおいては「比例」を重視する「幾何学」と「天文学」が取り上げられるのである。

さらには、「韻律」「比例」に共通している「数」にも言及がなされ、とりわけ、「研究(学問)」の「秩序」を明らかにするためにも重要なことがらと見なされるのである(第15章、第19章他)。

こうして『秩序』においては、少なくとも「秩序」は二つの意味で使われていることは明らかである。

## 5. 多義的な「秩序」?

ところで今、「秩序」とは少なくとも二義的に言われていることを確認したが、「秩序」はそれ以外の意味では使われていないのであろうか。

たとえば、第1巻の第1章には、「精神が虚弱で

あるため、万物の全体的な相互適合と協和とも把握し観察することができない」という言葉がある。ここで言う「相互適合」や「協和」というものは、ある意味で全体との関係で言われる「秩序」に他ならないのではないだろうか。

また、同じく第1巻の第2章には「宇宙の美」「一なるものとの全体の調和」という表現が見られる。こうした表現も、「秩序」に関わる言葉として捉えられるのではないだろうか。

さらに第1巻第4章では、原因の「秩序」について議論がなされるが、この「秩序」は、即座に「神の摂理」のうちに含めてよいものなのであろうか。

さらには、「秩序」の定義として、次のように言われている箇所がある。すなわち、「秩序とは、もしわたしたちが人生においてそれを保持しておくならば、わたしたちを神へと導くものであり、また、人生においてそれを保持することがなければ、わたしたちが神に至るところのないものです」(I,9,27)と。これはアウグスティヌスによって最初になされた定義として重視する必要があるが、ここで言われている「秩序」とはどのような意味で使われているのであろうか。

以上、これまでいくつかの用例に示される「秩序」とは、先の二種類、すなわち、「神の摂理」の「秩序」あるいは「研究」の「秩序」のいずれかに属するのであろうか。それとも、二種類の「秩序」とは別のものなのであろうか。

あるいは、「秩序」は、二種類あるいはそれ以上の種類にあるように見えるだけで、実は、一つのものなのだろうか。もっとも、アウグスティヌス自身は、『再考録』において、少なくとも二つの「秩序」を認めているわけで、ただちに一つのものということは難しいかもしれないが、しかしそこに共通している何かを求めることはあながち不当なことではないと思われる。

ともあれ、『秩序』においては、一義的ではない複数の「秩序」の用法があると捉えることにはさしあたって何ら不都合はなさそうである。

## 6. 『秩序』が目指そうとしたもの

ところで、アウグスティヌスは、『再考録』において、ひとつの「秩序」の解明がうまくいかなかったために、もうひとつの「秩序」の解明に切り替えた旨を語っているのであるが、これは、たしかに『秩序』を執筆してから40年後の見解としては当てはまるかもしれないが、もし、『秩序』執筆当時に、「こちらではだめだからそちらで」というような感覚で最初から取り組んでいたとしたら、それはいささか軽薄なのではないかという印象を受ける。

そもそもそのような著作を、果たして一つの作品として公けにし、しかも、ある人に献呈するようなことをしたであろうかという疑念が残る。

むしろ、ひとつの「秩序」からもうひとつの「秩序」へと変更したとしても、『秩序』という作品の完成を可能にするようなものが存在していた、あるいは、当初の「秩序」の解明を変更してまでも、アウグスティヌスが『秩序』という作品において実現しようとしたことがあった、と考える方が自然ではないだろうか。

そこで再びならず三度、『再考録』を見ることにしよう。

この書物の中では、神の摂理の秩序はすべての善と悪を含むかどうかという大きな問題を取り扱った。しかし、理解するのに非常に困難なこのことがらを、いっしょにたずさわっていた人びとに、討論によって把握させるよう導くことはとてもむずかしいとわかったので、わたしは研究の秩序について語ることを選んだ。というのは、人はそれによって形体的なものから非形体的なものへと進ませることができるからである。

最後の部分に、研究の「秩序」について語ることを選んだのは、人はそれによって形体的なものから非形体的なものへと進ませることができるから、と書かれている。

やや表現を変えて言うならば、「秩序」を知ることを通して、「秩序」の根源へと目を向けるようになることにこそ、本書の目指そうとしたものがあるのではないだろうか。

つまり、一方で、この世界に存在する「秩序」を知ること、他方で、その「秩序」を知ることによって神的事物へと導くことを目指していたの

ではないだろうか。もっとも、この両者のことがらは、同時的あるいは一つのものごとの両面と言ってもよいかもしれない。

すなわち、この世界に存在する「秩序」を知ることが実現するとき、すでに、人はある意味で神的事物へと導かれている、とすることができるのである。あるいは、神的事物へと導かれるとき、人はこの世界の「秩序」を知ることになる、と言ってもよいであろう。

この両者の要素が分かちがたく結びついているところに、『秩序』という作品の特徴があると言えるのではないだろうか。

そこで、『秩序』を執筆してから40年後の『再考録』の視点からではなく、『秩序』を執筆したその当時のアウグスティヌスの精神状況に即して考察を進める必要がある。

一体、アウグスティヌスは、「秩序」を知るために、どのようなことが必要であると考えていたのであるだろうか。

## 7. 「秩序」を知るために求められること

アウグスティヌスは、『秩序』の冒頭部分で、神の摂理の「秩序」について、それを何らかの全体的なものとして捉えており、その全体を見る眼を持つことの必要性とともに、そのことの難しさを説いている。

「精神が虚弱であるため、万物の全体的な相互適合と協和とを把握し観察することができない」(I,1,2)と言われている。

一方で、「自分自身に帰った魂のみが一と全体との統一性を理解する」(I,1,2)ということが言われており、それを理解できない、いわば誤謬の原因としては、人間が自分自身を知らないことがあげられている (I,1,3)。

それでは人間が自分自身を知るためにはどうしたらよいのであろうか。

「自らを知るためには、人間は感覚から身を引き、心それ自体へと集中し、自分自身に立ちかえっていくという大いなる習慣を、身につけるように精を出さなければならない」(I,1,3)と言われている。

「感覚から身を引く」であるとか、「自分自身に立ちかえる」といった表現には、アウグスティヌスが「回心」の直前に出会った新プラトン主義的な影響が如実に感じ取れる。

「回心」それ自身についても、「回心させられるということは、悪徳の跳梁から離れて徳と節制によって自分自身に高められていくことに他ならない」(I,8,23)と言われており、「回心」という出事の言葉化における新プラトン主義的な影響も否定できないところである。

むしろ、このことはキリスト教への「回心」という出来事そのものを否定するものではない。ただ、自らの身に起こった出来事をその当時の彼は聖書の言葉やキリスト教的な用語で十分に語ることもよりも、むしろ、新プラトン主義的な表現で彩っていたことは否めないし、また、そのことが可能であると考えていたことも確かであろう。

自分自身に立ちかえること、それは、ある意味で、神的事物へと向かうことでもある。

回心について、自分自身に高められることに他ならない、と述べられた後、続けて次のように言われている。

あるいはまた、わたしたちがそれを喘ぎ求め、それを愛することによってわたしたちが清められ、美しくなって、わたしたちがそこへ帰っていく、あの真理そのもの以外に、神の御顔とは一体何であろうか (I,8,23)

「秩序」を知ること、それは、自分自身に立ちかえることであり、それは、そのようにして神的事物に向かうこと、乃至は神的事物と向き合うことでもある。

このような理解が、『秩序』を執筆した当時のアウグスティヌスにはあったと思われる。

そしてさらには、神的事物に向かう上で、研究の「秩序」と言われているもの、すなわち、「自由学芸」については相当な期待を込めていたように思われる。

## 8. 神的事物に向かうために

第2巻の冒頭では、「神と共にあるもの」についての探求がなされる。明らかにここで念頭に置か

れているのは、魂、とりわけ知者の魂である。

すなわち、知者の魂は、常に神と共にあるか、ということが問われているのである。

さらに、「神的秩序の外で存在するものではないことを明らかにする学問があり、それは崇高で、多くの人々の夢をはるかに超えたものである」(II,7,24)と言われる。

そしてその学問は神の法それ自体であり、それは神のもとにしっかりとゆらぐことなくつねに留まっているのであり、知者の魂の中へいわば写しとられており、知者が理解することによってこの法をより完全に観想すればするほど、また生きることによってこの法をより忠実に遵守すればするほど、いっそう、自分がよりよく、また、より崇高に生きていることを知るのである、と言われる(II,8,25)。

ここで、「生活」についての「秩序」と「学問(研究)」についての「秩序」という二つの「秩序」が記されていることは注目してよいことであろう。

この学問と自由学芸を関連づけてアウグスティヌスが考えようとしていることは明らかであり、それがいわゆる「学問」の「秩序」と言われているものでもある。(もっとも、アウグスティヌスは晩年の『再考録』においては、「自由学芸」を重視しすぎたことを反省している<sup>(6)</sup>。)

こうして真理に至る二つの道として「権威」の道と「理性」の道の二つがあるとしながらも、この著作においては、「理性」の道を選び、「自由学芸」のそれぞれの学のうちに、「理性」によってたどることのできる「秩序」を見出していくことになるのである。

こうして、学問が人間を神的事物へと高めた(II,16,44)後、最後には、魂が自らを整え秩序づけて、調和のある美しいものとしたときには、魂は今やあえて神を、すなわちすべての真なるものがそこから流れ出る泉なる真理の父を見ようとするであろうと言われる(II,19,51)。そしてその眼については次のように言われる。

「偉大なる神よ、そういう眼はどんな眼であろうか。いかに健全な、いかにみごとな、いかに力強い、いかに節操の固い、いかに澄み切った、いかに至福なる眼であろうか」と。

## 9. 「神の摂理」の「秩序」

こうして、『秩序』においては、「学問（研究）」の「秩序」によって、神的事物に向かうことが可能である、という信念をアウグスティヌスが持つことができた故に、当初の計画は変更になったものの、何とか面目を保つことができたのである。

しかし、「神の摂理」の「秩序」についての理解が困難であるということはいわば宿題としてとどまることになったのである。やがて少しずつ解明されていくであろうその問題の行方については、この小論で見ることはできないが、少なくとも、『秩序』において、どのような点が困難であったのかは、簡単に見ておきたい。

それは、一言で言うならば、この世界の悪の問題に関することであつたと思われる。すなわち、悪は「秩序」の外にあるのか、それとも、悪は善と同様に「秩序」のうちに含まれるのか、ということをめぐる問題である。

それは悪がどのように生じてきたか、という悪の起源の問題とも関わるものであり、やがて、それは人間の自由意志の問題との関連で解明されることになるであろう。

また、悪が生じた後にも、神の摂理がそれを統御したかどうかという、いわば創造と統御に関わる問題についても、その当時はしっかりと区別することはしておらず、後に解明されることになるであろう。たとえ、「悪でさえも全体の調和に寄与する」というような言表が見出されるものとしても、そのことから即座に十分な理解に達していたと言うことはできないであろう。

### おわりに—「秩序」とは

ここで、アウグスティヌスが『秩序』を執筆した当時、「秩序」についてどのように考えていたかを見るために、アウグスティヌスの定義をもう一度引用することにしたい。

「秩序とは、もしわたしたちが人生においてそれを保持しておくならば、わたしたちを神へ導くものであり、また、人生においてそれを保持することがなければ、わたしたちが神に至るところのな

いものである<sup>(7)</sup>。」

この定義は、『秩序』のそのあとの議論でほとんど触れられることがなく、むしろ、リケンティウスによって定義された「秩序とは神が造りたもうたすべてのものがそれによって支配されるところのものである」という言葉の方が討論の対象になっていく。リケンティウスによる定義は、これまでの流れから言うと、いわゆる「神の摂理」の「秩序」について説明されているものである。

リケンティウスの定義が、この世界に存在するすべてのものがそれによって共通に支配されてものとしての「秩序」を意味しているのに対して、アウグスティヌスの定義は、この世界に存在するすべてのものというよりは、人間が有するものとしての「秩序」としての意味合いが強調されている。

もちろん、この二つの定義を整合的に理解しなくてはならない、ということはないであろう。というのも、そもそも『秩序』においては、「秩序」は一義的ではなく、むしろ複数の意味合いを持っているように思われるからである。

ただ、アウグスティヌスの「秩序」の定義は、この世界に存在するものは、人間も含めてすべて神によって支配されているのであるが、しかし、人間はそのような支配されるだけでなく、その「秩序」を有することによって、神に向かうことができる存在、神と共に生きることができる存在として位置づけられていることを示しているのではないだろうか。

むしろ、「秩序」を持つということの意味が、この作品において十分に明らかにされているわけではないが、そのような「秩序」を有することのできる存在として人間を捉えようとしているところに、アウグスティヌスの「回心」直後の人間理解の一つの姿を見出すことができるように思われる。

### 註

(1) *De ordine*, I, 8, 22; I, 10, 29; I, 10, 30を参照のこと。これらの記述からはその当時のアウグスティヌスの神に向かう精神的態度を垣間見ることができる。

(2) *Retractationes*, I, 3, 1.

Per idem tempus, inter illos quidem, qui De Academicis scripti sunt, duos etiam libros De ordine scripsi, in quibus quaestio magna versatur, utrum omnia bona et mala divinae providentiae ordo contineat. Sed cum rem viderem ad intelligendum difficilem satis aegre ad eorum perceptionem, cum quibus agebam, disputando posse perducere, de ordine studendi loqui malui, cum a corporalibus ad incorporea potest profici.

『秩序』の日本語訳としては、原則として、『アウグスティヌス著作集 第一巻』（教文館、1979年）所収の清水正照訳による。

(3) 『秩序』についての評価は、『告白録』（IX, 4, 7）にも記されており、そこでは「傲慢の学派」の影響下にあることを自認している。

(4) *De ordine*, I, 2, 5.

(5) 『アウグスティヌス著作集 第一巻』の「解説」 pp.499-505を参照。

(6) *Retr.* I, 3, 2.

(7) *De ordine*, I, 9, 27.

Ordo est, quem si tenuerimus in vita, perducet ad Deum et quem nisi tenuerimus in vita, non pervenimus ad Deum.



## Augustine on *ordo* in *De ordine*

Kikuchi, Shinji\*

アウグスティヌスは回心を経験した直後、カシキアクムという所に退き『秩序』を執筆した。

その中で、当初は、仲間たちと「神の摂理」の「秩序」について理解することを目指したが、その理解にはさまざまな困難が立ちだかっていたために、それまで彼が学びの蓄積があった「研究」の「秩序」を明らかにすることに方向転換をした。

このように『秩序』という著作は、必ずしもうまくいかなかったものの、人間が「秩序」を知ることの重要性については伝わってくるものがあり、それは、人間が「秩序」を知ることによって、この世界に属するものでありながら、この世界が神によって造られ、そして統御されていることを知ることができ、そのようにして、自らが神に向かい、神と共に生きている存在であることを捉えられるということである。

キーワード：秩序，創造，統御，摂理